

海獣人

東カリブ編⑦



松下政経塾 42期生 松田 彩

1988年7月広島市生まれ、36歳。米国・オハイオ州立大国際関係学部卒、中国・北京大学院哲学部中国哲学専攻。両国で12年間生活した。2021年度松下政経塾に入塾し現在4年目。日本と両国の3か国がバランスの取れた関係を続け、平和な生活を守るために、為政者を志す。食料安全保障や離島防衛などの観点から、日本の一次産業を強化したいと考え、特に漁業振興を探索。海洋大国・日本を目指す。

今回の本来の目的である捕鯨従事者との意見交換のため、バジェットファーム・コミュニティセンターに向かった。

会場には10人の捕鯨関係者が集まってくれた。

最初に日本捕鯨協会から意見交換会の趣旨と日本の捕鯨の現況を説明した。

ここでもハリケーン・ベリルの被害があり、鯨体処理施設「サンプル・ケイ」の傾斜路とウインチが壊されて、修理しないと使えないとのことだった。

これを機に施設の使用をやめようという声があった。元のプティ・ネビス島の方が解体場所としては使やすいという人が数人いた。

潮の流れの関係で曳（えい）鯨（けい）がしやすい、広い場所

所で祝祭などにも使えるとのこと。漁業者は捕鯨を通して島全体で得られる一体感を欲している。

サンプル・ケイは岩礁のため、狭く、小さく、大手インターネットの世界地図などにもきちんと表示されない。

しかしプティ・ネビス島は私有地で、相続でもめた2003年以降は使用でき



サンプル・ケイの鯨体処理施設⑥

ず、05年に日本の「草の根・人間の安全保障無償資金協力」で、国有の岩礁であ

うのため、クロサンゴ礁を削るとともに、揚鯨の傾斜路の場所を変更したいと

生存捕鯨という島文化

いう声も出された。

2年前の捕鯨の動画を見ると、洋上で解体。鯨肉の塊を人手で揚げている。ウ

インチは使用しておらず、絶対に必要なものではなく、そうだと思った。それよりも興奮した大衆が小さいサンプル・ケイにボートで向かい、解体見物をしたり、鯨肉を盗んだりという現実の方が危ないと感じた。

24年漁期（2〜4月）は、2頭にもりを打ち、1頭は逃がしたが、1頭捕獲した。逃げられても捕殺枠では2頭の扱いになる。毎年4頭までの枠があるが、多くて

2頭にもりを打ち、1頭は逃がしたが、1頭捕獲した。逃げられても捕殺枠では2頭の扱いになる。毎年4頭までの枠があるが、多くて

24年漁期（2〜4月）は、2頭にもりを打ち、1頭は逃がしたが、1頭捕獲した。逃げられても捕殺枠では2頭の扱いになる。毎年4頭までの枠があるが、多くて

セントビンセント・グレナディーン（SVG）の首都・キングスタウンは英国風の名称。1979年に独立したが、宗主国・英国の影響を強く受けている印象があった。しかしバルワイ

イーという地名は仏語で、激しかった英仏の攻防が感じとれる。

さらに電化製品や生活用品などは米国から輸入したりと、地理的に近い米国の影響もやはり強い。

ベグウェイ島の捕鯨は米国の捕鯨船団が南下しなければ始まらなかった。18世紀、米国は近隣海域だけで

も2頭しか捕獲できておらず、毎回、これが最後になるかもしれないという切迫感があるようだ。

少々高い服を着ていても、クジラが獲れたと聞くと、サンプル・ケイに向かい、鯨肉を入手したら盗まれないように頭に載せて運ぶ。血が垂れてきても気にしないといった風景も見られるらしい。

それほど鯨肉は大切に扱われている。鯨肉があっても家庭用の冷凍庫に隠している。ベグウェイ島でザトウクジラにありつくのは難しいそうだ。

カリブ地域では西洋人入植者やアフリカ人奴隷などが混在する、いわゆるクレオールが広がっている。

90年から1925年までにグレナディーン諸島から輸出された鯨油は50万バレル（189万2500バレル）。島外でも捕鯨が行われていたが、25年以後は捕鯨はベグウェイ島に限定されるようになった。

今回の訪問で最も印象的だったのは、ベグウェイ島の捕鯨関係者が捕獲枠さえ確保できれば、国際的に何が議論されても、国内外に反対の声があっても、先住民生存捕鯨という呼称が現実を反映していなくても、「一切気にしない」と言っていたことだ。

彼らにとつてはザトウクジラが来れば獲るだけのこと。それ以上でも以下でもない。

見せてくれた捕鯨ボートや道具への愛着も感じられた。時代を超えて捕鯨文化が受け継がれているベグウェイ島は、生き物と食べ物が隔絶されている現代にはとても希少な場所となる。機会の許す限り、訪問を重ねていきたいと思っている。（おわり）



捕鯨関係者との意見交換



洋上での解体（ビデオから）